

米国初の本格的な女性記者 潜入取材で大活躍 ネリー・ブライ 調査報道史を探る (1)

古賀 純一郎

要旨

本学部紀要に2009年度から筆者が続けてきた米国の調査報道の旗手、アイダ・ターベルの研究論文の連載は前年度で終了した。論文ではマックレイキングと呼ばれた当時の調査報道が全米に広がる不正や汚職の暴露で米国社会を根底から変える米変革主義に火をつけ、米国を大きく変える原動力になったことを取り上げた。では、同報道は、ターベルの登場によって突然、始まったのか。当時の米メディア史を調べるとそうではないことが分かる。

今回から始まる連載では米調査報道の源流を紐解くべく19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍した代表的な米ジャーナリストを取り上げて、果たした役割などを考察する。

第1回目は、世界初の本格的な女性記者として注目されたばかりか調査報道にも抜群の強みを発揮した19世紀の後半から20世紀の前半に活躍したネリー・ブライ（本名：ジェーン・エリザベス・コ克蘭）を考察する。

キーワード：調査報道、潜入取材、初の女性記者、ニューヨーク・ワールド紙、社会正義、ピュリツァー

第1章、ネリー・ブライとは

▽異なる記述

執筆で参考にしたのは主に米国で出版された書籍である。100年以上前の人物とあって文献はさすがに多くはない。本論文は、米ニューヨーク大教授のBrooke Kroegar(ブルック・クロエガー)著『Nellie Bly-Daredevil, Reporter, Feminist(ネリー・ブライー恐れを知らぬ人、記者、男女同権主義者)』、Martha E Kendall(マーサ・E・ケンダル)著『Nellie Bly-Reporter for the world(ネリー・ブライー世界の記者)』、Denis Brain(デニス・ブライアン)著『Pulitzer-A life(ピュリツァーある人生)』、Nelly Bly(ネリー・ブライ)著『Around the world in seventy two days(72日間世界一周)』、Nelly Bly著『Ten days in a Madhouse(精神病院での10日間)』、アイリス・ノーベル著『世界最初の女性記者ーネリー・ブライ』、マシュー・グッドマン著『ヴェルヌの八十日世界一周に挑むー4万5000キロを競ったふたりの

女性記者』、ネリー・ブライの米ウェブサイトの「*Nellie Bly Online*」などをベースに執筆した。

参考文献に当時の新聞王ピュリツァーが登場するのは、ネリー・ブライが所属したニューヨーク・ワールド紙のオーナーだったからである。濃厚ではなかったものの交流は少なからずあった。ブライの能力を高く評価しており、八面六臂の活躍で同紙の発行部数が飛躍的に伸長したことで気を良くしていた。

クロエガー教授の1994年に執筆した『ネリー・ブライ』には、序論に興味深い記述が掲載されている。世界初の女性記者が当時伏魔殿とされてきた精神病院へ捨て身の潜入取材を敢行、初の世界一周で新記録を樹立—などの偉業や実績を列挙した後に、連邦議会の図書館の図書目録にネリー・ブライの項目が「ない」との驚くべき事実を明らかにしている。

さらに、「全米のコンピュータの登録にも博士論文は1つもなかった」とも語っている。米国ジャーナリズム界の揺籃期の横綱級の大物記者、キーワードとなる重要な人物であることを想起すれば、これは極めて杜撰な扱いといえるだろう。とても残念であり、悪い意味で驚嘆すべきことである。

では、米国で出版されたブライ関係の書籍は皆無なのか。そうではない。児童向けには、ブライを扱った本が少なくない。筆者も入手した。クロエガー教授は、「幼年時代にその伝記を読み、感激し、自分の人生に影響を与えた最大の本である」とも語っている。ちなみに教授の前職は世界的に知られる米UPI通信出身のブリュッセル、ロンドン、テルアビブ支局など重要な地域を歴任したベテラン記者である。世界的に知られる知名人ではないものの第一級のジャーナリストといってよいだろう。

なぜ、こうした不可思議なことが起きるのだろうか。考えられるのはブライ自身が自らの半生を振り返って本格的な伝記を残していないことが第一の原因であろう。筆者がこの紀要に連載した『アイダ・ターベル研究』は2018年5月に『ロックフェラー帝国を倒した女性ジャーナリスト』(旬報社)として上梓した。この執筆では、ターベル本人の伝記『*All in the day's work* (仕事に疲れ切って)』に大変お世話になった。本人による自伝がなければ、この種の書籍の執筆はかなり厳しいと断言できる。そうした意味ではこの論文の執筆に大変、骨を折っている。

こうした資料の少なさが影響しているのか、これまで出版されたブライ関連の書籍は、その記述が細部が微妙に異なる。特に、初めて記者として記事を書くことになるペンシルベニア州ピッツバーグ市を本拠としたピッツバーグ・ディスパッチ紙時代に差がある。

1885年1月に同紙に採用されるきっかけとなったケースについて考察してみよう。同紙の社説が掲載した理想の女性像を説く「*What Girls Are Good for* (女子は使えるか)」を読んだブライが激怒し、反論の手紙を送付したのがそれだったのは多くの書籍や資料が掲載し、問題はない。

だが、細部が異なる。1956年に執筆されたアイリス・ノーベル著『世界最初的女性記者』

では、ブライの手紙を読んだ編集長マッデンが面談したい由を社告で伝えて実現。採用を懇願された編集長は渋ったが粘りに根負けし、条件を突きつけた。書いた記事の出来栄で判断することになった。実際、ブライの記事は、優れており即座に採用が決まったというのが内容である。

だが、ブルック・クロエガー著『ネリー・ブライ』など他の書籍やウェブサイトとは微妙に異なる。編集局の机の上に置かれていたブライの手紙を、日曜版に新機軸を吹き込めないかと考えていた編集長マッデンが偶然にも目を通し、主張に共感。新風を吹き込んでくれる人材ではないかと期待し、連絡を取りたい由をコラムに掲載。これを読んで、編集局を訪れたブライとの面談が実現した。

マッデンは「離婚」をテーマに記事を書いてほしいとあらためて要請、送られてきたブライの記事に編集長は感激し、採用が決まったというのである。なお、ディスパッチ紙に最初に紙面に掲載された記事は、反論の手紙をマッデンが手直したもので、見出しは、「The Girl Puzzle(少女の困惑)」、同25日付けの日曜版だった。

ネット上のサイト「Nellie Bly Online」やマーサ・E・ケンダル著『ネリー・ブライ』の説明はどうか。ニューヨーク大のクロエガー教授とほぼ同一である。違いは、差出人の名前で「Nellie Bly Online」が「Little Orphan girl(幼い孤児の少女)」。これに対してクロエガー教授は、「Lonely Orphan Girl(内気な孤児の少女)」。マーサ・ケンダルやアイリス・ノーブルの書籍には、差出人の記述はない。

「Nellie Bly Online」の「幼い孤児の少女」は、同25日朝刊に掲載された「少女の困惑」の記事の記者の署名だから、これと誤解した可能性がある。いずれにせよ、これには筆者は大いに困惑した。このためこの論文での記者に向けた助走期間となるこの時期の記述は、緻密な取材をベースにまとめたクロエガー教授の文献を主体にまとめた。ご了解をいただきたい。

Ⅶ生まれは南北戦争のさなか

ブライは、1864年5月5日、ペンシルベニア州西部のコ克蘭ズ・ミルズで生まれた。当時は、米国が北と南に分かれて戦った南北戦争（61～65年）のさなか、リンカーン大統領が奴隷解放を宣言した翌年である。

日本は、明治維新の4年前。尊王攘夷論が高まり、討幕の拠点でもあった長州藩を幕府が攻撃する長州征伐のあった動乱期である。

ミルは製粉工場、水車場を意味する。川沿いに数多くの水車が並ぶ一帯であった。父親は19世紀初頭にアイルランドから入植した家族に生まれ、後に裁判官となるマイケル・コ克蘭、母親は、2人目の妻であったメアリー・ジェーン・コ克蘭。前妻との間には、10人の子供がいた。

ブライの本名がエリザベス・ジェーン・コ克蘭であることは、この論文の冒頭に説明し

た。ニックネームはピンク。子供の頃ピンク色の洋服が好きで、この色にこだわっていたため母親がこう呼んでいた。原書には、幼年期の呼称として頻繁に登場する。

なぜ、コ克蘭は、ネリー・ブライという名前で米国のみならず世界的に知られているのか。これは、多少説明を要する。

全米、全世界に知られるようになったのは、捨て身の潜入取材、いわゆる調査報道で、これまで知られていなかった米国の社会の驚くべき実態の数々を暴露し、全米をアッと言わせ、米社会を震撼させる記事を連発したことが大きい。

当時の米国は、社会保障はもちろん労働者を守る法制度が未整備の初期資本主義時代。人権が完璧に無視された劣悪な労働環境での低賃金・長時間労働の現場や“金ぴか”時代といわれたこの時期特有の腐敗した政治や政治家がはびこっていた。

こうした米国の一連の闇の実態を危険を顧みず、背中合わせで取材し、その実態を暴露したのである。それも20歳すぎの若い女性だったから驚きをもって迎えられた。

当時、伏魔殿視されていた精神病院に、精神異常と偽って乗り込み、暴力、暴行、折檻などが横行し、患者の人権が完璧に無視された実態を白日の下にさらした。日本でも朝日新聞の記者がアルコール中毒の患者を装って精神病院へ潜入し、鉄格子の向こう側の実態を「精神病棟」というタイトルの連載でレポートし、大きな話題となったことがある。それは、戦後の1970年でブライ（1887年）に遅れること、実に80年超だった。

当時の米マスコミ界で活躍していた女性新聞記者の数はごくわずか。多くが婦人欄や文芸担当。しかも、記事の署名は本名ではなくペンネームが一般的だった。それは、女性記者の本名を自分の記事に掲載するのは、「はしたない」、「品性を欠く」ことと思われていたからである。在宅勤務が中心で記事は郵送していた。原稿用紙や新聞紙が散乱し、整理整頓のしつかりしていない編集局は、罵声が飛び交い、アルコールを煽りながら記事を執筆する記者もいたから女性に相応しい職場とは決して言えなかった。

既に言及したように編集長の要請を受けて85年1月に紙面に掲載された記事の署名はネリー・ブライだった。これは、『おおスザンナ』、『スワニー河』などを作曲した米国を代表する流行作曲家スティーブン・フォスターが1850年に作詞・作曲したヒット曲『Nelly Bly（ネリー・ブライ）』に登場する主人公の黒人の家政婦の少女の名前で、軽妙なメロディーが受けてさまざまな階層の老若男女に愛されていた。

編集長のマッデンは、ブライの記事を紙面に掲載する際にペンネームを何にするかの決断を迫られた。この時のいきさつも文献によって異なる。アイリス・ノーベル著『世界最初の婦人記者』は、考えあぐねていたマッデンの部屋の前をたまたま給仕が口笛を吹きながら通り、その歌がフォスターの『ネリー・ブライ』で、「これだ」と思ったマッデンの推しで付けられたとしている。

クロエガー教授は、編集長のマッデンが編集局の記者達に相談した結果、幾つかの名前が挙がり、その中から選んだとだけ説明している。Nelly Bly On lineは、「ネリー・ブライの

署名での採用が決まった」と記述している。

こうした経緯もあって、これまで執筆された論文、書籍では、主人公の名前はネリー・ブライに統一されている。本論文でもこの慣例を踏襲する。興味深いのは、フォスターの歌に登場する少女の名前「Nelly Bly」と記事の署名や文献の題名の「Nellie Bly」とスペルが違う。これは、違いを出したいブライのプライド、ご愛嬌といったところか。

裁判官だった父のマイケルは政治に深い関心があり、民主党支持者として地元で活動した。クルクト・クリークと呼ばれる川沿いのピットミルズに店を構え、4階建ての製粉所を買収するまでに経営を拡大した。その直後に地域の裁判官に選任された。こうした役職には地元の名士から選ばれた。一連の地域活動が評価され、父の名前にちなんで一帯をコ克蘭ズ・ミルズと地名変更した。

コ克蘭の最初の妻は、1857年に死去、その後妻がペンシルベニア州生まれのブライの母だった。その時、兄のポールは5歳、チャールズ3歳。父親は地元では裕福な方だった。だが、6歳の時に父は突然、死去した。まとまった財産を保有していたことから財産分与で揉めたものの10人を超える相続人の間で配分が何とか決定。地元の名士の銀行家がブライら一家の後見人となった。

それまでの大邸宅を離れて5部屋からなる2階建ての家に引っ越し、新生活が始まった。

ブライは、近くの小学校に通う。特に、勉強のできる児童ではなかったが、本だけはよく読んでいた。1873年1月、ブライが9歳になると、43歳になった母は、南北戦争の兵士でもあった年下の男との再婚に踏み切る。ほとんど財産もない吝嗇な大酒のみだった。家庭内暴力の典型で、始終乱暴し、「殺すぞ」とたびたびほめかした。素行もよろしくなかったことから離婚の訴訟を提起、ブライの法廷での証言もあって79年6月に離婚は認められた。

15歳のブライは75年に創立されたばかりの教師を養成するための近くの全寮制の学校へ入る。学費は父親の資産を管理する後見人から支給された。だが、生活が始まると支給が滞り1879年末には退学を余儀なくされたのである。

もっともブライは退学の理由を「心臓病」とワールド紙の経歴に記している。だが、過酷な記者生活の中で体調を崩した逸話などがないためこの真偽のほどが疑われている。

退学によりブライは故郷へ帰還。母親とともにペンシルバニア州アレゲニー市や姉妹のいる同州ピッツバーグ市へ住んだ。当時のペンシルバニア州では、世界で唯一の石油が採掘されていた。石油精製業のほか鉄鋼業など重化学工業が盛んで、煙と煤にまみれた工業都市であった。人口15万人の同市は新聞産業も興隆し、後にブライが働くことになるピッツバーグ・ディスパッチ紙をはじめとし、共和党系、民主党系などの7つの新聞がひしめいていた。

このピッツバーグ・ディスパッチ紙には、84年7月にスタートした名物記者エラスムス・ウィルキンソンによる人間愛やウィットに満ちたコラム「静かに観察 (Quiet Observation)」が知られていた。ブライも同紙の愛読者で毎日目を通していた。

第2章、ディスパッチ紙へ入社

ディスパッチ紙への入社は第1章で既に簡単に触れたが、助走期間の重要な部分を占めるのでここではあらためて詳細に説明する。1885年1月の同紙の社説ともいえるQ.O.(Quiet Observation) 欄で、最近の若い女性達は、「自分たちの身分から逸脱し、落ち着かず満足しない」、「(常に) 下らないものを追求め、見逃す」と手厳しく批判。「自宅を小さな楽園にしよう、自身が天使の役割を果たそう」、「女性の本分とは、家庭である」と呼びかけ、理想の女性像として「女性は結婚して家を守るのが一番」と結んでいた。

Q.O.欄の記述されていた社説の趣旨は、①一部の女性に職業に就く動きがあるが、これは実に嘆かわしい傾向②この結果、参政権獲得などの主張が出ている③家庭を離れるのは女性としての神聖な使命を忘れさせ、社会組織を破壊する一などで、女性に対して家庭に戻るよう主張していた。

「何も分かっていない」。これを読んだブライは、編集長宛てに反論をさっそく送付した。内容は、①女子といえども男と同じく知性も能力もある②米国は、市民の持つありとあらゆる才能を求めている③女性を低いものとして扱うのは、全市民の知性、能力を無駄にしている④女性も男性に伍して堂々と進出し、正しい地位を獲得すべきである一など。

届いた反論は、編集長の机の上に置かれた。これに目を通したマッデンは反応した。「この筆者は使える」、「日曜版に新しい何かをもたらしてくれる」と考えたのである。だが、連絡を取りたくても送り主の住所は封筒にも文面にも記載がなかった。

このため、同1月17日の同紙の編集長のコラム「郵送の小袋」に、「内気な幼い少女さん、名前と連絡先を伝えてほしい」とのマッデンの呼びかけが掲載された。ブライは、これを読み、「今週の水曜日午後3時に伺います」との返事を送付した。

床まで届くような長さの黒い服に身を包んだ小柄なブライは、水曜の午後、机を隔ててマッデンと向き合っていた。理想の女性像に対する反論の出来栄を高く評価していた編集長は、「2本目の記事を書いていただきたいのですが」と要請、ブライは快諾した。

その内容は、「離婚」についてであった。送られてきた記事は、議会上院などで議論されている離婚論争であった。議論しつくされたような観もあるテーマであったが原稿を見た途端、マッデンは驚いた。離婚制度に熟知した内容で、①問題を起こするような大酒飲みやろくでもない男を締め出すために離婚法を廃止する②新たな結婚のための法律を制定すべき③夫婦にとって既に耐え難い状態になった結婚生活から自らを解放する権利がある一など母親の離婚裁判で自分が証言した経験を踏まえた、とても新鮮さを感じる記事だった。

マッデンは正社員としての採用を決断した。週給5ドル。数年後には、年収2万5000ドルを超える全米有数の高給取りになったことを考慮すると低すぎる初任給である。

2本目の記事は、その次の週の日曜版朝刊に「愚かな結婚」との見出しで掲載された。既に触れたが、この時の記事の署名がネリー・ブライだったのである。

ブライは、次の記事として工場の過酷な環境で働く貧しい少女達の労働実態を暴露する記事の執筆を提案した。潜入取材への取り組みである。

第3章、潜行取材

次の週の月曜日朝、ブライは、ピッツバーグの工場がひしめくスラム街の入口で、デイスパッチ紙の相棒と待ち合わせをしていた。文献によって、大きなカメラ、フラッシュ、三脚などを抱えたカメラマンという記述もあるし、単にイラストレーターとの表現もある。

ネット上には、女性ジャーナリストのパイオニアとのタイトルでネリー・ブライの活動を紹介しているウェブサイト「Nellie Bly Online」がある。ここでは、当時のデスパッチ紙などに掲載された記事の一部を閲覧できる。

「Our workshop girls(工場での私達の少女達)」との見出しの記事をチェックすると、写真は掲載されていない。現場の様子や登場人物などすべてイラストである。乾板式が登場したのは1870年代で、カメラはとても高価だった。イラストレーターと考えた方が適切であろう。

この記事は、それまで知られることのなかった劣悪かつ倫理、道德の観点からも是認できない事案を取材し、それを紙面で暴露することによって世直しを目指す調査報道の1つといえる。ブライは日頃感じていた女性差別の凝縮された労働現場を世間の風にさらすことで反社会的ともいえる労働現場のあり方を糾弾した。それは、社会正義の貫徹を目指すキャンペーン報道でもあった。現代風に形容すれば、東南アジアなどの途上国で社会問題化している「児童労働」である。

その一つは、大勢の女工たちが長い列を作り、立ちっ放しで従事する瓶の洗浄工場。寒さと同居する激しい湿気、熱湯が流しに跳ね返り、手や顔にやけどをする。ブライ自らが工場内に入り込み、少女らから事情を聞き、記事には、それを盛り込んだ。ガラス瓶で頻繁に手を切るから生傷が絶えない。床に散らばる食物のゴミやカスを狙って集まるネズミ。驚くほど不潔で非衛生な労働環境。具体的な労働時間こそ触れていないが朝から晩まで続く長時間の労働時間。

少女たちは、足が痛くなるまで働かされていた。トイレは、2棟の工場で男女共用がわずかに1つ。記事には、登場人物の名前や具体的な工場名には盛り込まれていない。ブライは、これとは別に、ちょうつがいを製造する工場で働く10歳以下の少女の女工哀史像も紹介した。ピッツバーグ市内の貧民街にも出かけた。ゴミが散乱し、ネズミが出没する狭くて不潔な通りに入り、住民たちの話を聞いた。1家族が1部屋に暖を取る空間もなく、3度の食事にも事欠き、一緒に住んでいた。学校にも無縁な子供達。その10歳前後の子供たちが工場の1日14時間に及ぶ長時間労働に駆り出されていた。

連載は大きな反響を呼んだ。社会改革の指導者、婦人参政権論者、組合指導者、教育者、

宗教関係者などから励ましが数多く寄せられた。

だが、企業側の反応は必ずしも良くなかった。「工場の少女達」をはじめとして連載に掲載された記事の内容があまりにも悲惨で生々しく、社会の底辺で働く労働者の劣悪すぎる労働環境を告発する義憤の叫びが込められていたからである。読者の反応は、正義を支持する側と記事を非難する工場側の真っ二つに分かれていた。当然のように企業は広告の引き上げをちらつかせた。ブライはもちろん編集長のマッデンは批判の矢面に立たされた。

アイリス・ノーベル著『世界最初の婦人記者』によると、マッデンは、ここで妥協の道を選ぶ。ブライは、ファッション、社会、園芸、美術などを扱う部門へ異動となった。

次にブライが取り組んだ仕事は何だったのか。最初は、市内で上演されていた演劇「ジキルとハイド」の初日見参であった。こうした学芸関係の記事の執筆は1886年1月から始まり、春、夏にかけてオペラ、音楽会、美術展などを担当した。同9月からは、今度は、週1回のエッセイなどを執筆するコラムニストとして活躍した。

1年も経過するとこうした仕事が次第に退屈になってきた。ブライは採用当時に提案した海外取材が頭をもたげてきた。これまで女性に取り組んだことのないメキシコ訪問を持ちかけた。治安が悪いことを挙げてマッデンは思い止まるように説得した。

だが、ブライの翻意はなく、編集長の制止を半ば振り切って決行した。半年の予定である。安全を考慮して母親との一緒にした。第一印象は、確かに危険ではあったものの異国情緒たっぷりであり実に神秘的な国だった。

ブライはルポ形式の滞在記を早速したためてディスパッチ紙に送付、マッデンの判断でそれが紙面に掲載された。多くは、衣食住を中心としたメキシコ人の日常生活を伝える話が中心だった。最終的には、予定を1カ月繰り上げて帰国した。これは、同3月22日付の同紙に掲載したメキシコ政府を批判する記事の執筆がきっかけだった。

社説で政府を批判したことを理由に地元紙の編集長が逮捕された。米国憲法の修正条項で禁止されている政府による“言論弾圧”を記事に盛り込んだのである。これを知ったメキシコ政府は外国人による政府批判は、憲法に違反すると警告した。逮捕の可能性を知ったブライはあわてて帰国した。

帰国後は、数か月の滞在中に知ったメキシコ政府や政治家などの腐敗ぶりを紹介し、これを手厳しく批判する連載記事を執筆、「現存する最悪のmonarchy(国家)」、「共和国とは名ばかりの独裁国家である」と指弾した。前大統領の汚職についても言及したのである。

こうしたメキシコの現状を伝える一連の記事が高く評価されたのではないかと考えていたブライの思いとは裏腹に、帰国後、任されたのは、それまでと同じく、劇場や芸術の紹介や論評であった。世間をあっと言わせる潜行取材が得意のブライにとっては楽しいはずもない。不本意ながらも生活のため受け入れていた。

「役者のゴシップ(噂話)」、「芸術家の間」の2本のコラムもスタートさせた。悪いマナーなどをかき集めた「劇場でのエチケット」や、舞台を下りた役者の話題をあれこれ集め、新

機軸を打ち出した。もっとも、満足できたわけではなかった。87年3月20日を最後に社会部の自分の机の上に、書き置きを残して姿を消していた。「ニューヨークに行くので辞めます。自分のためです」。

第4章、新天地ニューヨーク

1887年8月、ブライは、ニューヨーク・マンハッタン南側、ニューヨーク証券取引所に程近いニューヨーク市警察に面するPark Row(公園通り)に立っていた。

パークローには当時、ニューヨークを代表する5大新聞社のうち3社が本社を構えていた。Newspaper Row(新聞社街)とも呼ばれていた。イエロージャーナリズムで知られる新聞王ジョセフ・ピューリツァーがオーナーのワールド紙、ザルツバーガー一家一族による経営で知られる高級紙タイムズ紙、トリビューン紙である。通りを隔てて向かいにはニューヨーク市庁舎があり、行政ネタの取材に便利なこともあった。

なぜ、ブライがここにいたのか。それは、ディスパッチ紙で身に付けた取材力を武器に当時の5社の一角の仕事にありつけないかと考えていた。知り合いはいない。面談の事前の約束なしの飛び込みとなる。

最大の部数を当時誇っていたのは、ハンガリー移民のジョセフ・ピューリツァーのワールド紙だった。4年前の1883年に倒産寸前だったのをウォール街の悪魔といわれた投資家のジェイ・グールドから買収した。スキャンダル路線をベースに一面に大見出しを貼り、センセーショナルな紙面に仕立てて大衆の歓心を買った。黄色いダブダブのパジャマ姿の丸坊主の子供、通称イエローキッドが辛口のコメントで当時の米国社会を風刺するマンガが人気をさらった。同じような発想で幼い子供に最近の人気パロディー漫画「クレヨンしんちゃん」を想起すればなぜ好評だったのか分かり易い。

主たる購読層の労働者を意識して資本家や政治家を手厳しく批判、社会正義の実現を目指す編集方針も好評を博した。記事の文章が短く、イラストを多用したことから英語の不得意な移民層にも受けた。ピューリツァーも移民だったから、彼らは何を求めているのかが分かっていたのである。その結果、発行部数は、4年間で10倍に拡大した。

ブライは実は、ニューヨークで生活を始めた5月以降、ピッツバーグの知人に、紹介を依頼して5社の新聞社幹部への接触を試みていた。だが、期待したほどの効果はなかった。ずるずると過ぎていく日々。蓄えも次第に減少した。古巣のディスパッチ紙へニューヨークの滞在記を送付し、原稿料を稼いだりもしたが焼け石に水。「何かやらなければならない」とせっぱつまっていた。

一計を案じたブライは、ディスパッチ紙のニューヨーク特派員と名乗り、各紙のデスクに面談を求め、女性の活用法を聞いて回った。上手く行けば、記者として自分を採用してくれ

るかもしれない。

このアイデアは借り物だった。ピッツバーグ在住の記者志望の女性から「ニューヨークでの採用はどうでしょうか」との手紙が同紙から転送されてきて、それを借用した。

順番は、サン紙、2番目がヘラルド紙、3番目がタイムズ紙。その次に週刊紙のメール・アンド・エクスプレス紙、テレグラム紙、最後がワールド紙だった。いずれも、編集長、デスククラスと面談した。いずれも「男性の記者が望ましい」、「女性は役に立たない」との回答だった。

女性記者の採用が極めて厳しい現実を知り途方に暮れたブライであった。5紙の幹部に取材した記事は、『ジャーナリスト』誌に掲載された。それ以上にブライを窮地に追い込む事件が発生していた。全財産100ドルの入った財布をすられてしまったのである。万事休すである。

背水の陣に追い込まれたブライは最後の賭けに出た。実力行使、直接行動である。向かったのはピュリツァーのワールド紙の本社であった。それまで立っていたホテルを買収して3年前に建設したばかりの20階建てビルの屋上には辺りを威圧するかのように金色のドームがきらめいていた。それまで最大ののっぽビルだったトリニティー教会凌ぐ350フィート(106.6m)の高さで、5年間米国一を誇った。

取材で一度訪問した経験を生かして入口の守衛の目をすり抜け、ロビーに入った。エレベーターに乗り19階の編集長ジョン・コックリルの部屋に向かう。面談には幾つかの関門を越えなければならない。「どうしたらよいだろう」。ブライは知恵を絞り、特ダネをチラつかせることを思いつく。

フロアーの受付嬢に「大事なネタがあります。お目にかかれなかったら、他の新聞社へ行きます」と伝えてほしいと面談の理由を説明した。これが奏功し編集長の部屋に通された。ディスパッチ紙での取材実績を強調して「自分を是非採用して欲しい」と強調したブライは、自分だったらこうした記事を書き、発行部数は拡大すると宣伝した。

具体的には、急増している移民を念頭に欧州に行き、移民たちのひしめく3等船室の雑魚寝の部屋で帰国し、劣悪な環境の船室の中で過ごす移民たちをリポートする案や患者を装って精神病棟へ潜入し、その体験記を連載するなどの当時の感覚では実現不可能と思われる大胆なアイデアを提示した。

コックリルは大いに関心を示した。だが、一存では決められない。オーナーのジョセフ・ピュリツァーの判断を聞く必要がある。クロエガー著『ネリー・ブライ』によると、この時、コックリルは、25ドルを握らせ、ブライをいったん帰した。

ワールド紙には、マンハッタン沿いに流れるイースト川の中州のブラックウェルズ島にある女性専用の精神病院から内部告発の投書が届いていた。患者に対する虐待が日常的に行われているというのが中身。日刊紙の多くは、当時、精神病院での入院患者の虐待を取り上げていた。ニューヨーク・タイムズ紙が特に、熱心に報道していた。ワールド紙も同様に、社

説で「これを調査すべき」との論陣まで展開していた。

最終的な判断を下したのはピューリッツアーだった。欧州から押し寄せる移民たちの大西洋上での船の生活の取材にはほとんど共感せず、精神病院への潜入取材に興味を示した。それは、地元の話題から取り組むべきとの考えがあったようだ。

告発型報道ともいえるこの取材は、ワールド紙が社是とした、「すべての公共悪と権利の濫用と戦う」にも合致した。コックリルとの話し合いで、潜入する際の偽名をペンネームから少しだけデフォルメし、ネリー・ブラウンと決めた。

土壇場で、ブライは、当時全米で最大の発行部数を誇ったワールド紙への入社を首尾よく果たした。そして、満を持したかのようにその真骨頂である世間を驚かせる捨て身の潜入取材が敢行される。

なお、ワールド紙への入社の際緯であるが、アイリス・ノーブル著『世界初の女性記者』の記述はこれとは異なる。当時のワールド紙の最階上には、オーナーのピューリッツアーと編集長の部屋が隣同士であった。編集長コックリルとブライの面談中に2つの部屋を仕切るドアを開けて分厚い眼鏡をかけたピューリッツアーが現れた。これによって3人による協議が始まり、ピューリッツアーの判断で潜入取材が決まった、としている。この時のドイツ語なまりのピューリッツアーの発言などが微に入り細に入り盛り込まれている。

デニス・ブライアン著『ピューリッツアー』とも異なる。編集長との面談で23歳のブライは自分が書ける記事のリストを編集長に手渡し、経済的な苦境を知って編集長はブライに25ドル渡し、「検討してみます」と言って帰した。リストは、オーナーに手渡され、内部告発からの投書が届いていたブラックウェルズ島の精神病院の扱いに苦慮していたピューリッツアーは、「素晴らしいアイデアだ」と絶賛し、ブライの案の採用が決定、潜入後のしかるべき時の救出案なども確約したなどと解説している。

第5章、新聞王ピューリッツアーとワールド紙

結論から言うとブライの精神病院への潜入取材は成功し、大反響を呼ぶ。その紹介の前に約8年籍を置くことになるワールド紙やピューリッツアーについて紹介しよう。

当時米国最大の発行部数を誇っていたワールド紙は、ハンガリー生まれの移民で新聞王と呼ばれるほどの名声を勝ち得たピューリッツアーが1883年5月11日に創刊した。ピューリッツアーはそれ以前はセントルイス・デスパッチ紙のオーナーだった。

その名声は米ジャーナリズムの最高の栄誉と褒めたたえられ、故人の名前を冠したピューリッツアー賞で知られている。亡くなる直前に200万ドルの基金をニューヨークのコロンビア大学に寄付。基金が創設された。200万ドルは、現在のレートで換算して2億円強。100年以上も前はこれを何倍も上回る相当の価値があったものと想定される。

ピューリッター賞を毎年選定する米コロンビア大学のウェブサイトによると、当時のジャーナリズムは社会的地位が低かった。それはワールド紙にも責任の一端があった。同紙は、部数拡大の原動力となったセンセーショナルな記事を得意とし、御世辞にも上品とは言えない針小棒大に伝えるイエロージャーナリズム路線などを推進した。

現代風に言えば、フェイク（偽）ニュースもあって扇情的な路線を採用する新聞への一般の信頼も高くはなかったのである。これを反省したピューリッターの記者の資質と読者の信頼を向上させるためコロンビア大学にジャーナリズム学部を創設し、「記者教育に力を入れてほしい」との願いが込められていた。記者に対する評価を医者や弁護士並みに引き上げたいとの意向を持っていたようである。

健康を害し、視力も衰え死期を予感したピューリッターが米国の米ジャーナリズムの将来を考えて創設を提案したことが容易に想像できる。構想を最初に申し入れた1892年には、理事らの反対で実現しなかった。理由は、「イエロージャーナリズムの（汚れた）カネを受け取れるか」との趣旨だったようだ。

だが、捲土重来を期して、要望をより具体的にまとめ、優れた報道に対する年間のジャーナリズム賞の創設を加えてジャーナリズム学部の創設をコロンビア大学へ要請。大学は、今度は快諾した。ピューリッターは、以前から「私の考えは、ジャーナリズムは偉大で知的な職業の1つであるべきだと認められることである」と語っていた。

ピューリッターが64歳で死亡した翌年の1912年にジャーナリズム学部と同賞が創設された。第1回目は1917年に授与されたのである。

賞は現在、同大に設けられた米メディア界の重鎮らによって構成される選考委員会により選ばれている。委員の任期は3年、最高9年まで在籍可能。現在の委員は、2017年7月に選任された、前ニューヨーク・タイムズ紙上級編集長のダナ・カナディーのほか委員会の議長のワシントン・ポスト紙コラムニストのジーン・ロビンソン、コロンビア大学ジャーナリズム学部大学院学部長のステイブ・コール教授など。

南北戦争のため欧州で募集された志願兵として応募し、米国に渡ったピューリッターは、北軍に属し傭兵として従軍した。戦いが終わると失職し、新しい仕事を見つける必要に迫られた。英語が未だ不得意ということもあってドイツ人の集まるミズーリ州セントルイス市へ移動、ドイツ語の日刊紙に職を見つけた。

おぼつかなかった英語も必死の努力で上達した。猛烈な仕事師で、不正を糾弾する記事を連発、経営にも関与し、当時同市にあったドイツ語紙とセントルイス・ディスパッチ紙を買収した。

「汚職や腐敗を摘発し、悪事を働いている者たちを暴露する」の路線を中軸に据えた結果、2紙を統合したセントルイス・ポスト・ディスパッチ紙の部数は急拡大した。だが、社員の起こした刑事事件をきっかけにピューリッターは、同市を離れ、新聞の本場ニューヨークへ移動した。1883年に、ゲーテの『ファウスト』に登場する悪魔を援用してウォール街のメフィ

ストフェレスとも呼ばれた投機家ジェイ・グールドから保有するニューヨーク・ワールド紙を買収、編集方針をがらりと変えて事業に乗り出す。

編集方針とは、セントルイス・ディスパッチ紙で成功した路線の踏襲であった。5月11日の創刊号では、大衆のための新聞と銘打って新機軸を打ち出した。世に知られる“大衆紙の宣言”である。W・A・スウォンバーグ著『ピュリツァー—アメリカ新聞界の巨人—』（早川書房）からその一部を引用しよう。

「真に民主的で大金持ちのためよりも庶民のために献身し、旧世界よりも新世界のニュースに専念し、あらゆる詐欺とごまかしを摘発し、あらゆる公共の悪と権力の乱用と戦い、真心と熱意をもって、民衆に奉仕し、民衆のために戦うといった新聞を容れる余地が、ますます発展しつつあるこの大都市には、充分あるであろう。新生ワールド紙は、この大義とこの目的のためにのみ、知性ある一般の皆さまの愛顧にひたすらこたえようとするものである」。

さらにピュリツァーは、米国社会に社会正義が実現するためには、①贅沢への課税②相続税③大口所得への課税④独占に対する課税⑤特権を持つ企業への課税⑥歳入のための関税⑦行政機構の改革⑧腐敗した役人の処罰⑨投票買収の処罰⑩選挙で従業員に圧力を加える雇用の処罰—などを挙げた。この10件の提言のうち「歳入のための関税」を除き、これを規制する法律が現在までに制定されている。

ピュリツァー関連の話題は、ここでひとまず終了し、ブライへ戻ろう。社会正義の実現による大衆の新聞を目指すオーナーの編集方針から理解できるように、精神病院への取材はワールド紙のジャーナリズムの方向とまさに合致していた。ゴーサインが出たのは当然であろう。

既に簡単に触れたように今回の潜入取材には前段があった。実は、以前からこの種の精神病院に対する疑惑が渦巻いていた。投書などから入院患者に対する暴行や虐待、折檻などが日常的に横行しているとの疑いが強まっていた。ブルック・クロウザー著『ネリー・ブライ』によると、すべての新聞が市内でのこうした精神病施設での虐待行為を取り上げていた。

特に、ワールド紙は、直前の7月3日から同9日まで社説でブラックウェルズ島の北方のワーズ島の慈善施設などで発生した看守による精神病患者の殺人事件などを取り上げて待遇改善の必要性を訴えていた。ニューヨーク・タイムズ紙も同様に、8月の紙面で、ブラックウェルズ島の精神病患者に対する残虐行為などを批判していた。当時のニューヨークのメディアにとっては、これは喫緊の関心事であり、大きなテーマだった。

伏魔殿から首尾よく脱出した後に連載した記事は大きな話題を呼んだ。掲載された日曜紙は完売となり、新聞は異例の増刷もされた。記事は、いくつかの州の地方紙にも掲載され、全米の市民の知る所となった。記事は、後に『精神病院での10日間 (Ten days in a Mad-House)』にまとめられ、ベストセラーとなった。

ブライが調査報道の事件記者として知られるきっかけとなった次の第6章は、同書をベースにまとめる。潜入記の第1章の「細心に注意を要する任務」から最終章となる第17章の「大

審院の調査」で構成されている同書のうち「ゴールが視野に」の第7章までが、病院への潜入までに立ちはだかる障害を紹介。第8章の「精神病院の内側」から第15章の「収容施設の中の生活」までが滞在中の記録、第16章は脱出後の経過となっている。

第6章、精神病院へ潜入

「精神病院に滞在し、その実情を暴露した結果、ニューヨーク市当局が患者たちの世話のため年間100万ドルの予算を以前より増額したと伝えることができて嬉しい。貧しく不幸な人々が私の仕事により、よりよい世話を受けることができると知ったことで少なくとも満足している」。潜入記は、悪夢のような10日間をブライが振り返った序章で始まる。

ブライの暴露記事で、暴力や虐待が日常的に行われていると噂されてきた精神病院の内情が事実であることが明らかとなり、これを重く見た行政を動かし、予算が増額されたのである。ワールド紙の目指す社会正義が実現されたともいえよう。

▽2つの関門

提案したものの良からぬ噂がひしめく精神病院への潜入は、前代未聞の挑戦であり、潜入取材がオハコブのブライも緊張し、危険を感じた。内部には悪党らがひしめいている可能性もある。だとすれば、リスクは大きく、被害は命にまで及ぶかもしれない。

まずは潜入法である。どうするか。その前段として、患者と認定されなければならない。精神異常をどう装うか。ブラックウェルズ島の病院を直接訪れても入院できるはずもない。策略を考える必要がある。では、何をやったのか。

『精神病院での10日間』の第1章は、マンハッタンを流れるイースト川の中州に浮かぶブラックウェルズ島の精神病院へ潜入して欲しいとの要請を受けるシーンから始まる。患者の様子や病院の運営について、ありのままの記事を書くためである。

虐待、暴行などの危険が十分想定される。ブライは、こうした厳しい試練の任務に耐えられるだろうかと思い悩む。精神異常のふりをしても医者の目はすり抜けられないのではないだろうかとの心配が頭をもたげる。

ブライは打診に対して「できます」ときっぱりと回答した。だが、一抹の不安は残る。自力脱出できない時に救援の手を差し伸べてくれるのだろうか。「どうやって救出してくれますか」と念を押した。

編集長のコックリルは、「分からない。だが、必要となれば君が誰であるか、何の目的で精神異常のふりをしているのかを説明して救出する」と答えてくれた。

潜入工作は、ネリー・ブラウンの偽名で敢行することになった。宿泊先に戻るとこの練習に没頭した。これまでの人生で精神異常者をみたこともない。文献に目を通してどうふるま

えばよいかを考えた。

鏡の前に座り、瞬きもせず、できるだけ目を大きく開けて、放心状態のふりをした。これを数日間、続け、納得できた段階で実行した。

旅行者を装ってマンハッタン2番街の値段の手頃な施設に滞在することに決めた。アイリス・ノーベル著『世界最初の婦人記者』（佐藤亮一訳）によると、当時、マンハッタンには市から補助金を受けている女子臨時宿泊所があった。知り合いのいない婦人が落ち着くまでの数日間滞在できた。ブライは名簿録でこの宿泊先を見つけていた。

貧しく不幸で気の狂った少女を演じる。首尾よく行けば、目指すブラックウェルズ島へ潜入できる。こう考えたのである。

入口の前でベルを押した。間もなく黄色い髪の若い女性が現れた。2-3日滞在したいことを告げると、1人部屋以外なら空いていると教えてくれた。1晩の宿泊料の30¢を支払って入室した。

ここからがブライの役者としての演技の連発である。上手いかなければ、潜入取材は、海の藻屑と化してしまう。一世一代の大ばくちである。

待合室で座っていると突然ベルがけたたましく鳴った。部屋のドアが一斉に開き、宿泊者が階段を下りていく。施設の係から声が掛かり地下へ降りた。大きな部屋に並んだテーブルの椅子に座って大勢が食事中だった。ブライもこれに加わり宿泊者の様子を観察した。

夕食を終えて戻ると早速、開始した。休憩室でくつろぐ宿泊者を尻目に宙を見つめ、頭を時折かきむしり、奇声を発した。施設の係が来て「どこか悪いの」と心配してくれた。

口の中にハンカチを詰めて吹き出しそうになるのをこらえながらブライは「皆はなぜ、私を気違いのように怖がるの」、「皆、気違いのように見える」と泣き続けた。担当者は、「また来るからね」と言って立ち去ったが戻ってくることはなかった。

夜食の時間帯では、宿泊者が再び集まった休憩室の中で、「皆が気違いにみえる」とまたしても声を張り上げた。施設の担当者からは部屋に戻りベッドに入るように促された時も大声で「ここにいる女性は皆、気違いに見える」と叫んだ。

周りに集まった宿泊客からは、「こんな気違いと一緒に居るのは怖い」、「夜明け前に全員が殺されるかもしれない」とのしる声が聞かれた。寝るように促されるがブライは、「(自分が宿泊客に) 殺されてしまう」と断固拒否、徹夜を宣言した。

宿泊中の1人が悪夢にうなされて深夜、叫び声をあげた。ナイフを持ったブライに殺されるところだったというのである。休憩室のブライは一睡もせず、大きな声を挙げて時折、泣き叫んだ。施設の係からは、「静かにできないようであれば、ここから出てくれないか」とたしなめられた。ブライは「トランクがまだ届いていないし、ここにいたい」と懇願した。

翌朝、施設の係が警察署へ出向き、大柄の屈強な警官2人を連れて戻ってきた。ブライは、警官と一緒に外に出て警察署へ向った。人定質問などを終えると、今度は精神異常かどうかを判定するため裁判所へ向かうように指示された。

到着すると同じような質問を受けた。裁判官に対してブライは「始終、頭痛がしてすべて忘れてしまった」、「質問を受けるたびに頭痛がひどくなる」と繰り返し、記憶喪失を装った。

記憶喪失症が珍しいのか新聞記者の取材もあったが最終的に医者が精神鑑定し、裁判官は、ブライが麻薬中毒になっている可能性を指摘した。医者の検診の結果、ブライの鑑定のための病院行きが決まり、待機していた救急車に乗車した。これによってブライは、最初の関門をクリアした。次を突破できれば実現する。あと一歩である。

到着するといかにも粗暴という雰囲気の方がやってきた。いきなり暴力的に引きずり降ろされ、事務所へ連れて行かれた。待機中の数人の事務官から矢継ぎ早の尋問が始まった。ブライは回答を拒否、今度は患者が数人いる精神病棟へ連れて行かれた。

部屋の中での脱帽を求める看護婦に対してこれを拒むブライ。規則を力づくで守らせようとする看護婦との間でトラブルが発生した。滞在中にブライは複数の医者の診断を受けて精神障害が認定され、ブラックウェルズ島の精神病院へ送られることが最終的に決まった。ブライは他の患者とともに救急車で船着場へ運ばれ、警戒厳重な船に乗って島に到着。再び救急車に乗せられた。

Ⅶ風呂場での虐待

「ここはどこですか」。質問に対して監視役は「決して脱出できない狂気の島、ブラックウェルズ島だよ」と答えた。最終目的地へ到着したブライは満足感にしばし浸っていた。

車は芝生を抜けて低層の建物の前で止まり、下車。病棟の建物に入り、階上に上った。4人の専門医から精神異常者との宣告を受け、出口をかんぬきで閉ざされた精神病院での生活が始まった。雑用は患者に割り当てられていて、既に入所している患者たちが部屋を用意してくれていた。

直後にブライが驚いたのは、ドイツ語しか話せない少女が入所していたことだった。英語がほとんどできないため病状を説明できずに精神病院へ送り込まれていたことが判明、入所後そうしたケースが少なくないことが分かった。

ブライは自著の中で、「通訳を用意すれば良いものを、こんないい加減なことがあって許されるものか」、「自分の無罪を立証する機会があまた与えられている犯罪者が未だましな扱いを受けている」と憤っている。

2番目に登場したのが、直後の病棟のお風呂場で受けた虐待である。氷のような冷水の入ったタライの中での水浴と看護人やその補佐である患者による暴力的な扱いだった。

入室すると「服を脱ぎなさい」、「さもないと実力行使することになります」と脅かされた。一杯になったタライのそばで、施設の中で最も凶暴だとされる女性がぼろい手ぬぐいを持ってにこやかにほほ笑みながら立っていた。悪魔のようで、ブライは震えた。拒んだものの最後の下着の一枚もはぎ取られたためその瞬間タライの中へ飛び込んだ。

顔、髪と患者らが取り囲んでゴシゴシ洗う。抵抗するブライは寒くて鳥肌が立ち、ガタガ

夕震えた。最後は頭から目や鼻や口に冷水を3回続けざまに掛けられ、その時は溺れかけ、「その時に1度だけ気違いになった」と自著に記している。

与えられた短いフラノのスリッパ姿で6つのベッドのある部屋へ急行。布団の中へ入り、冷たくなった体をあたためた。騒いだためかブライは1人部屋へ移される。寝巻が無いので、注文したら「あなたは今いるのは公共機関です。何も期待できません。慈善事業なのでただのだけで感謝すべきです」、「ここでは優しい対応は期待出来ません」とピシヤリと拒否された。毛糸の毛布があったのでこれをかけて寒さをしのいだ。

病棟のドアはすべて施錠されている。窓にもかんぬきが掛かっており、逃げることは不可能。患者は約300人。火事になったら大惨事になるだろうと寝ながらブライは考えた。

Ⅶ驚くべき行進 劣悪な食事

起床は午前5時半、同7時15分にホールに集合し、朝食。パンと冷たい紅茶、オートミル。パンにはクモが入っていたこともあった。終了すると今後は、ベッドの掃除など。同9時半は医者診察。ノートと鉛筆が欲しいと看護人に頼むと、「ダメです。お黙り」との返事が戻ってきた。医者にお願いするともらえた。

病棟内の散歩もある。患者全員が白い麦藁帽をかぶり、監視付きの2列の行進。意味のない奇声を発しながら練り歩く、酷いにおいのする汚れた集団もいた。うつろな目に表情のない顔。質問すると「島で最も暴力的な人たちです」との返事が返ってきた。

驚くべき行進にも出くわした。太くて長いロープが幅の広い皮革のベルトに繋がれており、これが52人の患者達の腰の周りに固定されていた。重い鉄製の手押し車がロープの端に繋がれ、2人の女性が中に乗って奇声をあげていた。島には、1600人の患者がいるのである。

「食事は、恐ろしいものの一つだった」劣悪な食事についてこう言及している。朝食と同様に夕食も満足できるようなものではなかった。ブライはいつもお腹を空かしていた。夕食では、朝、紅茶の入っていた鉢にスープが入っていた。皿には冷たいジャガイモと牛肉の大きな塊が盛ってあったが、だめになりかけていた。

ナイフやフォークもなく、手で持つかぶりつく患者の様子はまるで野蛮人のようだった。最初の2日間を除くと塩も胡椒もなかった。マスタードや酢も肉にはついてしたが、付けると味は悪くなった。

新しい魚も茹でられただけ、マトンも牛肉もわずかばかりの味付けさえもなく、患者たちは飲み込んで飢えをしのいでいた。対する看護婦らには美味しそうな肉やパン、高級果物などが用意されていた。ブライのひもじさは10倍増幅した。

施設の責任者が休憩室に姿を見せることもあった。だが、看護婦に殴られるという理由で、誰も待遇改善を要望することもなかった。

Ⅶ暴行、虐待、折檻

患者への虐待も事細かく取り上げている。「患者を殴打し窒息させる」の第13章では、折檻などをされた3人の女性を紹介している。

1人目は白痴の33歳の女性のウネラ。「年齢18歳」、「自宅に戻りたい」と始終言い張っていた。誰も取り合わず、泣き叫び始めると静かにさせるために叱責され、看護婦らは顔と頭を殴打、指の跡が残るほど首を絞められた。

2人目は白髪の年老いた女性で「お願いだからぶたないで」と懇願すると看護婦らは「このおバカ、お黙り」と言って、泣き叫ぶ女性の白髪をつかみ、物置小屋へ連れて行った。

3人目は大金を失ったことで精神異常をきたした年老いたドイツ人のマチルダ。看護婦らは、この老女に不快な言葉を投げかけ、いじめることで楽しんでいた。看護婦は、ささやくようなふりをして老女の耳に唾を吐きかけていた。マチルダは何も言わず、唾を拭いていた。

「不幸な物語編」の第14章では、虐待された複数の女性の実名を挙げてさらに紹介している。世間と隔絶された孤島の伏魔殿の中で看護師らによる力による折檻や虐待が日常的に繰り返されていたことがこれによって一段と明確になった。

看護師や補助役の介添人による日常的な暴力のみならず、診察に当たる医者から折檻などを受けていたと証言するのがドイツ人の女性ルイーゼ。体調不良に陥ってしまい気が付いた時には、ここに追いやられていたというフランス人の女性ジョセフィーヌ。異常なところがまったくなく、ブライは、精神病ではないと判断していた。絶望的になり泣き叫んでいたが、看護師や介添人から喉が傷つくほど首を強く絞められ、以降、痛みが続いていると訴えていた。

夫に無理やり入所させられたという英語のあまりできないユダヤ人の若い女性サラについてもブライは精神異常ではないとみていた。話をすると普通にやり取りできる。貧乏なため救貧院への入所を希望したらいつの間にかここに來たと打ち明けてくれた。医者の診断の結果、さまざまな日課が免除された。サラは精神異常というよりもむしろ貧乏な女性が病棟に収容されているのではないかと語っていた。

あまりの潔癖症を問題視されて入所することになったドイツ人の若い女性マーガレットは騒いだのをとがめられて目があざになるほど殴打された。これ以外にも隔離病棟に移され、ロープで縛られ、恐ろしいほど殴られ、あげくに、髪の毛をつかまれて引き回され、窒息するまで水中に拘束され足蹴りされたブリジットなどもいた。

患者たちは、看護婦から「医者に抗議しても妄想だろうと言われるよ」、「告げ口したら殺す」などと日常的に脅かされていた。

ロッジ小屋という名の最悪の施設もあった。内部は、驚くほど汚くとんでもない悪臭でむせ返っていた。食事でも酷く、外出は許されず、外からかんぬきを掛けられていた。何年もそこに閉じ込められている患者もいた。看護婦に飛びかかれてろっ骨を2本折ったとの証言もあった。

「汚れた部屋への入室を拒んだ病気の若くて可愛い女性が看護婦に殴打され、冷たい風呂に裸のまま入れ、寝かせたら翌朝死んでいた」、「多量のモルヒネを注射するので患者らは気違いになる。複数の麻薬の結果、患者が凶暴化しているのを見たことがある」などの衝撃的な証言も取り上げている。

▽脱出

そうしたブライにもブラックウェルズ島を去る日がきた。「島は人間のネズミ取り」、「入るのは簡単だが、ひとたび入ると出るのは不可能である」と潜入記で書いている。

島の滞在の10日目、ワールド紙の弁護士のパイター・ヘンドリックスが訪れた。ブライの面倒を見てくれる人物が現れ、退去させる由を病院側に伝え、了解を得た。

その時、病棟の庭で列を作り散歩している途中だった。直ちにその列から離れ、仲間を残して島から立ち去った。残して去ることに痛みを感じ、わがままではないか、との気分もあった。後ろ髪をひかれる気持ちがあったことは確かである。

解放を記した第16章の「最後のさようなら」の末尾にブライは、「その瞬間に患者たちを助けたいとの騎士気取りの欲求が湧いてきたが、それはほんの一瞬だった」、「かんぬきは下ろされ、自由はこれまでよりさらに心地よかった」、「川を渡ると直ぐにニューヨークが近づいてきた。10日ぶりに私は再び自由の身になった」と振り返っている。

ブライの取材はこれですべて終わったのか。そうではなかった。これが始まりでもあった。

翌週日曜日の10月9日にワールド紙日曜版の一面トップで、ブライの署名入りの潜入取材の記事の連載がスタートした。第1週目のタイトルは「精神病院の内側」、第2週目は「精神病の女性を演じる」である。

初回はネット上でネリー・ブライの業績や当時の記事を閲覧できるウェブサイト「Nellie Bly Online」で掲載された紙面を確認できる。ワールド紙専属のイラストレーター、ウォルト・マクドガルによる挿絵が5枚挿入されており、ブライの奮闘を体感できる。

精神病院の内部を本格的に報道した連載は初めてで、国内ばかりか海外の新聞にも掲載され大反響となる。ブライは“時代の寵児”となる。記事は、『精神病院での10日間 (Ten days in a Madhouse)』にまとめられ、世界中で発売される。

暴露記事は、これまで知られることのなかった精神病院内で横行している暴行や折檻、はては殺人未遂とさえも思えるような証言の連続など空前絶後の人権侵害の実態を初めて明らかにした内容だった。ニューヨーク市の予算が投入されていたこともあって当局は重大な関心を示した。

▽大陪審の調査

ニューヨーク市の検察局は大陪審を招集、証人として召喚され、ブライは「喜んで」出席した。記事の信憑性について間違いないと宣誓し、地区の検察官らが調査を開始した。精神

病院での2週間後の実地調査が決まり、陪審らはブライの同行を依頼する。

同日のイースト川を渡る船は、薄汚れた船でのブライの最初の訪問とは、まったく別の真新しい清潔な船に一変していた。看護婦の何人は既に大陪審で調べられ、反論書が既に提出されていた。

大陪審の調査に対して責任者の医者は、「浴室での対応などは分からない」、「食事が粗末なものであることは知っていたがそれは、予算が不足のため」、看護婦の対応についても「確かめる方法がない」、「採用の仕方がまずいので医者がダメなのである」などと釈明した。

偽名で潜入したブライが親しくしていた女性の患者の1人に話を聞くこともできた。彼女は、「ブラウンさんがこの施設にいた時は、看護婦は残酷で食事までひど過ぎた。着るものも十分でなかったしもっと欲しいとブラウンさんはいつも要求していた」、「奇妙なことに、ブラウンさんが消えてからすべてが変わった。看護婦らはとても親切になり、着るものもたくさんもらえる。医者らは頻繁に来るようになったし、食事は、とても良くなった」と答えた。

台所やホールも整理整頓がきちんとされ、清潔になっていた。ベッドもあらたまり、浴室もバケツから新しいピカピカのたらいに変わっていた。申し分のない施設になっていた。

ブライが紙面で取り上げた患者のほとんどは、他の施設に移されたのか、姿が消えていた。フランス人の患者も麻痺で死にかけているということで面談は叶わなかった。

ブライをあまり信用していなかった陪審員らは、現場の視察で一変したことが分かり、見方が変わったようであった。陪審らが裁判所に提出した報告書は、ブライの意見が大幅に採用された。この結果、病院に対する年間予算が100万ドル増額されたのである。

Ⅶ大きかった反響

記事への反響は大きく、ニューヨーク市のサン紙、ヘラルド紙、イブニング・テレグラム紙、タイムズ紙などがコラムで取り上げた。ニューヨーク以外の北米の新聞も注目し、ブライの業績を称賛した。コメントの多くは、素人同然の女性が精神病の施設に潜入し、告発記事を書いたことが中心だった。

オーナーのピュリツァーは、業績を高く評価するとともにそれに値する報酬を提供、同時に「輝かしい将来が待っている」とブライに期待を表明した。これによって、ブライはわずか数か月で、全米で最も良く知られる記者となったのである。

この後、有名人になったブライはさまざまな記事に挑戦することになる。その一つが体験記。軽い読み物で、ブライがさまざまなテーマに挑戦した体験談である。バレーやコーラスガールなどの体験談を面白おかしく書いた。大いに受けたため、それ以外にも対象が拡がり、「ネリー・ブライ空を飛ぶ」、「ネリー・ブライ催眠術師になる」、「ネリー・ブライが囚人になる」などの見出しの記事が紙面を飾った。

八面六臂のこうした活動にワールド紙の同僚はどう思っていたのか。積極評価する記者もいたが、自分たちの領域を土足で乗り込んでくると批判的な態度を取る記者達も少なくな

かった。次のケースは、同僚の反発を買った案件である。

第7章、スクープに挑戦

Ⅶ 議会の黒幕を手玉に

83年3月、ニューヨーク州で蔓延する汚職を告発する記事を書いてほしいとの投書がブライへ届いた。その矛先は、州都オールバニで活躍する大物ロビイストのエドワード・フェルプスに向かっていた。「ニューヨーク州議会の黒幕」、「ロビイストの帝王」とも呼ばれていた。

ロビイストとは、連邦や州の議会の議員に対して特定の団体や個人に代わって政治的、経済的な主張を展開し、連邦あるいは州政府の政策にそれを反映させる活動するのが仕事である。金銭と引き換えに特定の団体の主張を通すのがロビイストの役割だから金権腐敗の議会、議員、州政府に対して鉄槌を下す形になった。

州都へ乗り込んだブライは、フェルプスの本拠のホテルを訪問した。豪華な服に身を包んだ薬品会社の社長夫人に成りすまし、大金を支払うので自社に不利な法案の成立を阻んでくれるよう要請。フェルプスは2つ返事で承諾し、入魂のニューヨーク州の議員らに声を掛ける。金品とバーターで議員らは法案潰しに奔走、それが確実となった最終段階でブライは行方をくらます。そしてその翌日に、カネで法案潰しに動いた複数の議員と黒幕フェルプスの実名入りでスクープし、州議会のただれた実態を暴露した。ニューヨーク州議会が恐慌状態に陥ったのはもちろんである。

本丸ともいえるスキャンダルを新米の女性記者にスクープされたことで社会部からの反発があった。その後はこうした記事の潜行取材は自重することになる。

Ⅶ セントラルパークの女性の敵

マンハッタンの市民が集う憩いの場でもあるセントラルパークで発生していた現職警官の絡む女性の“敵”を征伐した案件も捨て身の行動が事態を解決した。功績の1つである。

発端はこれも投書だった。セントラルパークで馬車に乗り、警察官の名前を語って若い女性を言葉巧みに誘い、悪事を働いている不審な男がいるというのである。

ブライは、田舎から出て来たばかりの少女のなりをしてセントラルパークへ早速繰り出し、ベンチに座りあたりをきょろきょろした。すると1台の馬車が何度も周回し、間もなく、荷台の男が馬車の乗るよう促した。男は近くにいた警官に目配せし、去ろうとしたブライの前に立ち塞がり、馬車に乗るよう促した。

やりとりの中で男は劇場に知り合いがいるから舞台に立たせてあげることもできるなどと吹聴しブライを信用させた。その日はそれで終わり3日後に再会することになった。約束の日にはベンチで待っていると、馬車がやって来た。

乗り込むと男は、今度は威圧的な態度に急変。酒場まで連れて行き、アルコールを飲ませようする。ブライは頑強に抵抗し、間一髪、逃れたのだが、田舎から出てきた若い女性をだまし、食べ物にする悪徳商法を暴いたばかりかこれに警官が加担している事実を掘り起こした。

ブライはこのやりとりを紙面で詳しく紹介、ニューヨーク市民や同市警で大問題になり、停職となる警官が続出した。

Ⅶエマ・ゴールドマン

特ダネの連発で成果を上げたブライは、その後は、著名人のインタビューに専念した。相手は、当時の政権にあったハリソン大統領の閣僚の夫人、女性参政権運動の活動家、無政府主義者のエマ・ゴールドマンなど。当時の米国社会では、名前が良く知られる第一級の人物を選んだ。

ここでは、『72日間世界一周』の大記録樹立後に、一時的にワールド紙を離脱し、復帰した直後に取り組んだ刑務所でのゴールドマンとのインタビューを取り上げる。

バルト3国の一角を占めるリトアニア生まれのゴールドマンは、第二次世界大戦でナチス・ドイツの迫害から逃れるため避難してきたユダヤ人に対し日本の外務省からの訓令に反してソ連経由でアジア、米国へ逃げるための臨時ビザを発行して多くの命を救った日本の外交官杉原千畝の勤務地として知られるカウナスの出身である。ユダヤ人家庭に生まれ、いったんはロシアのペテルブルグに移住したが15歳の時に姉とともに米国へ移住した。無政府主義者としてのほか女性の権利獲得などでも活動した。

ゴールドマンは暴動を扇動したとして数回投獄されており、面談は、刑務所内で行われた。著書は数多く無政府主義者の政治哲学の発展に大きく貢献したとの評価もあるようだ。

矢野寛治著『伊藤野枝と代準介』によると、日本の婦人解放家と同時に無政府主義者でも知られる伊藤野枝が多大な影響を受け、ゴールドマンの著書『婦人解放の悲劇』を翻訳したばかりか、娘をエンマと名付けたほどである。

伊藤野枝は1923年9月の関東大震災の混乱に乗じてやはり無政府主義者の夫大杉栄とともに9月16日に憲兵特高課へ連行され、憲兵隊司令部で殺害された。軍法会議の結果、甘粕正彦大尉らの犯行と断定されたのはよく知られている。

記事は、ブロック・クロエガー著『ネリー・ブライ』に詳しい。同書によると、記事の見出しは、「ネリー・ブライ 再び」「エンマ・ゴールドマンら無政府主義者へインタビュー」。

短い髪に流行の柄付き眼鏡を掛けたゴールドマンら3人の挿絵が掲載されている。首元に特大の蝶ネクタイを結び、あでやかさも感じさせる一方で口をへの字に結んだゴールドマンは眼光鋭く、知的で意志の強い女性の印象である。記事の見出しの“再び”は、世界一周旅行後のゴタゴタでいったん離脱したスター記者が、ワールド紙に再び復帰したことを知らせるためこうした表現を使ったと思われる。

記事から伝わるゴールドマンへの印象や評価は極めて良好である。「こぎれい」、「少しも汚れていない」、「現代風のブルーの綾織りのスーツを着て身だしなみも良い」などとの肯定的な表現が続く。その情熱や誠実さに心を打たれたのか、深い共感を感じさせる記事を残している。

当時のニューヨーク・タイムズ紙は、ゴールドマンを「血気にはやる無政府主義者」と表現していたのに対しブライは「現代のジャンヌダルク」、「小さな無政府主義者」と形容している。

冒頭に、身長5フィート（約150センチ）、体重120ポンド（約54・5キロ）で小柄、リトアニア出身、ドイツで育ちなどとその経歴を列挙。資本主義の害悪について、「貧困を形成し」、「犯罪を助長する」などと力説。結婚制度について、「愛情による結婚、これが本当の結婚。お互いを気遣うのであれば愛情が続く限り一緒に住む権利がある。愛情が無くなれば一緒にいる理由は何なのでしょうか」などと語っている。

結婚による結びつきがなくなれば、子供が見捨てられる懸念が出てくるとのブライの指摘についてゴールドマンは、「それは、公共的な施設が面倒を見ればよいのでは」などと反論。間髪入れずに、ブライは無政府主義者による鉄鋼王のヘンリー・フリックの殺人未遂事件を念頭に、「殺人はそれを補強すると考えますか」と切り込んだ。

ゴールドマンは、やや考え込んだ後に「議論するには長いテーマです。人を殺すことで得るものがあるとは思いません」、「私達は目的を達成できると固く信じます。それまで激論し、教えることで満足します。望んでいるのは、単に正義と言論の自由です」などと語っている。

4日続いた裁判は10月10日に終了した。判決は、ユニオン広場で開催された集会でゴールドマンが暴動を扇動する演説をしたという理由で1年の懲役刑だった。ブラックウェルズ島の刑務所からの出所後もゴールドマンは失業者を扇動したことは一切ない、自身は潔白との主張を繰り返していた。

これには、ワールド紙の報道が少なからず関係している。ユニオン広場でのゴールドマンの演説などを執筆したワールド紙の記者が記事について上司の編集者によってひどく改竄されたと言っていた。ゴールドマンは法廷での宣誓もない新聞に掲載され、歪曲された記事によって、自分の運命が決まってしまったと厳しく批判していた。

良心の呵責を感じたのか、ワールド紙は、この判決の際に法廷でのゴールドマンの演説の全文を掲載したいと申し出た。これについて了承したゴールドマン側は、演説で歪曲した記事を掲載する一方で法廷での演説の全文を掲載するというのは、ブルジョワ新聞として一貫性がないのではと指摘していた。

第8章、世界一周へ

ブライが世界的に知られるようになったのは、『精神病院の10日間』と世界一周の旅行記『72日間世界一周』の2つである。いずれも、若い女性が危険を顧みずに挑戦した前代未聞の報道として注目され、直後に単行本となった。記事は主要国の新聞で紹介されて評判を呼んだほか、単行本は翻訳され、ベストセラーにもなった。ブライが世界一有名な女性記者といわれるようになったのはこうした背景がある。

女性記者がほとんどいない時代のマスコミで男性顔負けの大活躍を果たし、その分注目度が高かった。当時は、参政権を実現するための婦人の権利獲得運動が盛んな頃。女性は能力的にも劣っていることはなく、努力次第で男性以上の実績を上げることができる実例として高く評価され、第一次世界大戦後に実現した婦人参政権にも大きく貢献した。

世界一周の企画が突然浮上したのは、ワールド紙の部数減とも関係がある。ブライは、国内を避けてアイルランドのベルファストで次のタイトルマッチのために練習中の米プロボクシングのヘビー級チャンピオンのジョン・L・サリバンにインタビューした記事が1889年5月の紙面に掲載された。

この頃の発行部数は34万6000部に迫っていたが、その後、注目される記事もなかったため漸減傾向が続いていた。このためワールド紙主導で実現したニューヨークの象徴である自由の女神像の台座の募金キャンペーンに匹敵するイベントを開始する必要に迫られていたのである。ニューヨーク・マンハッタンの中島のエリス島に立つ女神像は、自由の象徴としてフランスから1885年に供与された。その台座の資金はワールド紙のキャンペーンによって集められた。

世界一周のブライのアイデアは、当時のベストセラーで映画にもなったフランスの作家、ジュール・ヴェルヌ著の小説『80日間世界一周』がモチーフとなっていた。その英語版が出版されて15年経過したが、新記録の樹立にチャレンジする人物がいなかったのである。

ワールド紙の指令は、89年11月11日の月曜日の夕刻に発せられた。3日後に出発して欲しいとの突然の要請である。論説委員がブライのパスポートの取得のためワシントンへ派遣され、国務長官に直訴、翌日に発行となった。

身の回りの準備をしなければならないブライは、翌日の朝、マンハッタン5番街の高級洋装店へ出向いた。そこで旅行用の長くてゆったりした格子縞のブルーのガウンを注文した。3か月間連続して着ても耐えられるしっかりした素材で、水曜日を期限とするあつらえをお願いした。加えて、防水のしっかりした帽子、ブレスレットやイヤリング、革のバンドの腕時計なども購入した。いずれも旅行用である。ワールド紙は支度金として200ポンドの金とポンド札を用意してくれた。ポストンバッグを1つ持った記録への挑戦である。

今回の論文は、スペースに限界があるためここで終わる。連載の続きは世界記録の樹立した『72日間世界一周』を中心に、金満家との結婚、ジャーナリストと慈善事業家の“2足の

わらじ”をはいて生涯一記者を貫いた晩年などについて記述する。

(続く)

◎参考文献

【原書】

- ・ Brooke Kroeger著『Nellie Bly: Daredevil, Reporter, Feminist』(Times Books,1994)
- ・ Denis Brian著『Pulitzer -A life』(John Wiley & Sons, Inc.2001)
- ・ Mark Twain& Charles Dudley Warner著『The Gilded Age- A Tale of Today』(Gabriel Wells,1873)
- ・ Nelly Bly著『Around the world in seventy two days』(Wildside Press, LLC,2009)
- ・ Nelly Bly著『Ten days in a Madhouse』(Wildside Press, LLC,2009)
- ・ Michael Klepper & Robert Gunther『Wealthy 100』(Citadel Press Book,1996)

【和書】

- ・ アイリス・ノーブル著『世界の新聞王ージョセフ・ピューリツァー伝』(講談社、1958年、佐藤亮一訳)
- ・ 角川書店編集部『世界の人間像3』(角川書店、1961年) この中にアイリス・ノーブル著 (佐藤亮一訳) の「世界最初の婦人記者」が収納されている。
- ・ 古賀純一郎著『ロックフェラー帝国を倒した女性ジャーナリスト』(旬報社、2018年)
- ・ 古賀純一郎共著『現代ジャーナリズムを学ぶ人のために』(世界思想社、2018年)
- ・ 本田創造監修『アメリカの歴史第4巻 アメリカ社会と第一次大戦』(三省堂、1996年)
- ・ ハーバード・G・ガットマン著『金びか時代のアメリカ』(平凡社、1986年、訳者天下尚一など)
- ・ W・A・スウォンバーグ著『ピューリツァーーアメリカ新聞界の巨人』(早川書房、1988年、木下秀夫訳)
- ・ マシュー・グッドマン著『ヴェルヌの「八十日間世界一周」に挑むー4万五千里を競ったふたりの女性記者』(柏書房、2013年、金原瑞人・井上里訳)
- ・ 矢野寛治著『伊藤野江と代準介』(弦書房、2012年)

ウェブサイト

- ・ Nellie Bly Online <http://www.nellieblyonline.com/index>
- ・ 研究論文などの資料などは割愛した。

(終)